

令和 8 年 2 月 20 日

大阪市総合教育センター  
教育振興担当 実践研究グループ  
首席指導主事様

研究コース	
A グループ研究A	
校園コード(代表者校園の市費コード)	
581216	
選定番号	111

代表者	校園名:	泉尾北小学校
	校園長名:	岸上 智弘
	電話:	06-6551-0028
	事務職員名:	佐々木 駿
申請者	校園名:	泉尾北小学校
	職名・名前:	校長・岸上 智弘
	電話:	06-6551-0028

### 令和7年度 「がんばる先生支援」報告書

◇「がんばる先生支援」について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	新規研究(1年目)												
2	研究テーマ	<p align="center"><b>「自己有用感を高めるマルチレベルアプローチ」</b>  <b>～SEL、協同学習、アセスメントを活用した包括的生活指導による通いたい、通わせたい学校の創造～</b></p>															
3	研究目的	<p>本研究では、学力・体力が向上し安心して通わせたい学校づくりの視点から、マルチレベルアプローチ(包括的生活指導のこと。SELや協同学習、ピア・サポート、PBIS)がどのように有効であることを明らかにするため、以下の3つの取り組みを行う。</p> <p>1. QUAアンケート及びアセスを活用して、SELや協同学習を中心とした泉尾北小学校の「主体的・対話的で深い学び」をめざす取り組みが学級における児童の有用感にどのような影響を与えているかを分析できるようにするとともに、いじめ、虐待、不登校の未然防止、早期発見にどのような効果があるかを検証する。</p> <p>2. 学級活動や授業におけるSELや協同学習によって、将来の夢や希望を持てるようになるとともに、学力・体力が向上することで自己有用感を改善させる。</p> <p>3. マルチレベルアプローチを通じた実践を進めている他校を視察して成功ケースから学び、本校の実践を改善し、学び続ける教員集団としてどのような取り組みが効果があるか研究の成果をシェアする。</p>															
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。(MS Word 9.5KB以内)</p> <p>4月 【研究部①】 研究テーマ、研究の進め方、見込まれる成果等について検討          ・昨年度までの成果と課題をふまえ、研究内容の焦点化          ・先行研究(新潟県立教育センター、戸田市立美女木小学校)をもとに年間計画を立案          【研究全体会・全体研修会①】年間計画の共通理解</p> <p>5月 【全体研修会②(校内)】「hyper-QU及びアセス分析学習会」</p> <p>6月 【研究部会②】各アンケートの実施・分析</p> <p>7月 【全体研修会③】          「感情と社会性を育むSEL教育の導入と実践」講師 京都大学研究員 高見 佐知</p> <p>8月 【「授業づくりセミナー」・「日本学校教育相談学会 研究大会 京都大会」参加】          【全体研修会④】「日本学校教育相談学会 研究大会 京都大会 伝達講習会」</p> <p>9月 【授業研究会①3年】(研究協議会・指導案検討会)指導助言 京都大学研究員 高見 佐知10月          【授業研究会②2年】(研究協議会・指導案検討会)指導助言 京都大学研究員 高見 佐知          【日本生徒指導学会・名古屋大会】参加</p> <p>11月 【授業研究会③1年】(研究協議会・指導案検討会)          【がんばる先生支援 研究発表会・授業研究会④4年】(研究協議会・指導案検討会)          授業研指導助言 京都大学研究員 高見 佐知          【全体研修会⑤】「日本生徒指導学会 名古屋大会」伝達講習会</p> <p>12月 【授業研究会⑤6年】(研究協議会・指導案検討会)指導助言 京都大学研究員 高見 佐知          【茅ヶ崎市立浜之郷小学校 視察は中止が決定】          【研究推進委員会③】各アンケートの実施</p> <p>1月 【がんばる先生支援 研究発表会・授業研究会⑥5年】公開授業・研究協議 指導助言 京都大学研究員 高見 佐知</p> <p>2月 【研究推進委員会④】          ・学力経年調査の結果分析          ・各アンケートの分析          ・研究のまとめ作成、がんばる先生支援報告書作成・提出</p> <p>3月 【全体研修会⑥】研究大会の伝達講習(S・E・L、ウェルビーイング等)まとめ          【研究全体会】次年度へむけて、本年度の成果と課題の共通理解</p> <p>※研究発展の転機となったのは7月の全体研修会③であり、これまで取り組んできたSSTの実践がSELが理念とするウェルビーイングにつながる事が分かった。学級での実践を積み重ねていき、本研究の目的である自己肯定感を高めていくことができるようになった。</p>															
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	<p>研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。</p> <table border="1"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 7 年 11 月 25 日</td> <td>参加者数</td> <td>約 21 名</td> </tr> <tr> <td>場所</td> <td colspan="3">大阪市立泉尾北小学校 多目的室</td> </tr> <tr> <td>備考</td> <td colspan="3">第2回の公開研究発表会は令和8年1月30日に実施し、参加者は19名であった。</td> </tr> </table>				日程	令和 7 年 11 月 25 日	参加者数	約 21 名	場所	大阪市立泉尾北小学校 多目的室			備考	第2回の公開研究発表会は令和8年1月30日に実施し、参加者は19名であった。		
日程	令和 7 年 11 月 25 日	参加者数	約 21 名														
場所	大阪市立泉尾北小学校 多目的室																
備考	第2回の公開研究発表会は令和8年1月30日に実施し、参加者は19名であった。																

6	成果・課題	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、「<b>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力</b>」の育成および「<b>教員の資質や指導力</b>」の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p>
		<p><b>【見込まれる成果1】</b></p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>ＱＵアンケート及びアセスによる分析をもとに実践を改善していくことで、児童の自己有用感が高まり、被害感が減少する。また、不登校の改善が達成されるようになる。</p> <p>≪検証方法≫</p> <p>○ＱＵアンケートの学級生活満足群の割合が全学年平均43%以上【全国平均42.5%】</p> <p>○令和8年1月末における校内調査において、前年度不登校の改善の割合が増加する。【令和6年度0%】</p>
		<p>[検証結果と考察]</p> <p>○ＱＵアンケートにおける学級満足尾群の割合の推移は、1年44→25、2年42→39、3年76→79、4年65→46、5年50→58、6年24→45で、トータルは50.2→48.7であった。目標の42.5はクリアできているが、学年によっての差が大きかった。次年度もどのような傾向があるかを分析していく必要がある。読解力に限界がある1年生はどうしてもできるアクティビティが限られ、一方6年生は課題に合わせてワークシートを改善することが可能であることがわかった。○令和8年1月末における校内調査において、前年の不登校の改善の割合は100%（2件中2件）だった。</p>
		<p><b>【見込まれる成果2】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>取り組みの分析を積み重ね、改善をしていくことで、学力が向上する。</p> <p>≪検証方法≫</p> <p>○令和7年度の小学校学力経年調査における各教科の平均正答率の対市比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年・教科も前年度より3ポイント向上させる。【新6年国97.6→103.6→101.4、社93.5→106.0→92.3、数98.2→100.5→116.6、理102.6→103.5→94.5、英93.9、新5年国105.7→96.4、社109.3→86.8、算108.5→103.4、理99.5→90.3、新4年国83.1、社80.7、算75.8、理79.3】</p>
		<p>[検証結果と考察]</p> <p>○令和7年度の経年調査における各教科の平均正答率を、同一母集団において経年比較したものは次の通り。【6年国97.6→103.6→101.4→99.6、社93.5→106.0→92.3→91.0、数98.2→100.5→116.6→105.9、理102.6→103.5→94.5→95.5、英93.9→101.2、5年国105.7→96.4→98.3、社109.3→86.8→93.6、算108.5→103.4→95.9、理99.5→90.3→93.1、英91.9、4年国83.1→80.7、社80.7→81.5、算75.8→88.2、理79.3→88.6、3年国107.2、社103.0、数115.5、理101.6】6年では2教科向上し、3教科低下し、トータルは-6.1、5年では3教科向上し、1教科低下し、トータルは+4.0、4年では3教科向上し、1教科低下し、トータルは+20.1 4～6年のトータルポイントは+18.0であった。実践を本格実施した2学期以降、学習への取り組みが早くなり、自信をもって取り組む姿が見られるようになった。</p>
<p><b>【見込まれる成果3】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>「SEL」教育の研究・実践をすすめることで、児童の自己有用感や自己肯定感など豊かな心が育成される。</p> <p>≪検証方法≫</p> <p>○令和7年度の小学校学力経年調査における「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」、「自分には、良いところがあると思いますか」、「学校のきまり・規則を守っていますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合をそれぞれ、96%、77%、90%以上にする。【全市の目標と同値、なお令和6年度は、「人の役に立つ人間になりたい」93.9、「自分には、良いところがある」78.8、「学校のきまり・規則を守っていますか」90.3】</p>		
<p>[検証結果と考察]</p> <p>○令和7年度の小学校学力経年調査における以下の質問に対して、肯定的に回答する児童の割合は、「人の役に立つ人間になりたいですか」…6年95.2、5年93.6、4年100、3年100でトータル97.2。「自分には、良いところがあると思いますか」…6年95.2、5年80.7、4年73.9、3年96.3でトータル86.525。「学校のきまり・規則を守っていますか」…6年95.2、5年90.4、4年95.7、3年100でトータル95.325であった。いずれの項目も目標を大きく上回ることができた。取り組みがはやくSELの実施回数が多かった3年で数値が大きく向上した。</p>		

6	成果・課題	<p><b>【見込まれる成果4】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>「協同学習」の研究をすすめることで、児童が主体的に協働する授業がより展開されるようになる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>○令和7年度の小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を35%以上にする。【R4 41.0⇒R5 34.2⇒R6 30.3】</p>
		<p>〔検証結果と考察〕</p> <p>○令和7年度の経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合は6年28.6、5年41.9、4年56.5、3年48.1で、トータルは58.37であった、学年ごとに差はあったが、目標はクリアした。SELの授業は話し合う活動や考えを深めて広げる活動が多いため、自然と協働学習の意識が高まったと考えられる。</p>

6	研究全体を通じた成果と課題	<p><b>【研究全体を通じた成果と課題】</b> 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p>
		<p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>・令和8年度以降の大阪府教育振興基本計画改訂（素案）では、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が掲げられている。学校教育によって身体的・精神的・社会的に良い状態にするには、どうすればいいのか。</p> <p>・本校では、本研究の主題であった自己肯定感の向上をめざす研究が行き着いた先が特別支援学級在籍の有無に関わらず「すべての児童にソーシャルスキルトレーニングを導入することであり、それにSELの理念を加える」ことで結果として全国でも稀な実践を行うことができた。SSTは実践例が豊富であるが特別支援限定分野+ウェルビーイングは最新の概念として導入されるが具体的にどのように日本の学校で実践するか先行事例が少ない。</p> <p>・SELの授業は実践すればするほど、子どもたちのウェルビーイングは向上し、いじめは減り、学力は向上する。次年度は、SELの年間計画を今年度を参考に組み替え、「一年間でこの時期はこのSELをする」というあらかじめ用意するSEL+「担任の判断によって、この学級コンディションを改善するためにこのSELを実施しよう」という引き出すから出すSELの二方向から実践を進めていく必要がある。</p> <p>・この研究は全国でも先進的な研究であるため、「日本生徒指導学会」より実践報告を依頼されている。全国の教育実践者のトップが集まる会でたくさん示唆をいただき研究をブラッシュアップしていく。</p>
		<p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p>
		<p>3. 継続研究（3年目）</p>
		<p>《代表校園長の総評》</p>
		<p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>・本研究をサポートしてくださった。元大阪府教育センター指導主事であり、現在一般財団法人未来教育研究所研究開発局長の高見佐知先生には改めてお礼をお申しあげます。アメリカが本場のSELにおいて、先行事例を翻訳し、日本、特に大阪市の教育に馴染みやすいようプログラムをブラッシュアップして我々に提示していただくことを8回にわたる研修会で実施していただきました。</p> <p>・図らずも本研究は次期学習指導要領が掲げる「ウェルビーイング」を達成するための教育実践の先駆となった。手探りで始まった1年目を経て、2年目は型を体験し、3年目に浸透させ、意識せずとも継続できる実践としていく予定である。</p> <p>・研究発表には特別支援担当の教員が多く来校された。異口同音におっしゃるのは、「SSTは特別支援学級だけの専売ではなく、学校全体として取り組むことで相乗効果が期待できる実践です。ぜひ、うちの学校でも、学校総体として取り入れられるようにしていきたい」とおっしゃっていた。指導案通りにコーディネートしていけば、失敗なく大きな成果が期待できるしくみである。大阪市だけでなく全国に広がる取り組みとして実践していきたい。</p> <p>・本校は本年度まで学力向上チーム事業の重点支援校として学力向上に取り組んできた。今回の経年調査では計6教科において大阪市平均を上回ることができた。次年度以降も研究を継続し、相乗効果を発揮していきたい。</p>
		<p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p>
		<p>3. 継続研究（3年目）</p>